

sky's the limit

皆月蒼葉
Minadzki Aoba

0

安物のプロジェクターから放たれる、目の荒い立体映像^{フツテイジ}。共有サイトからダウンロードしたブート版だ。タイムスタンプは17ヶ月前、ライブハウス「ゼン」での19時37分からの23秒間。流れる音声は粗雑な量子化で高音が削り取られ、ひどくくぐもって聞こえる。

映像の中心にいるのは小柄な女性MC。年の頃は16程度といったところだろうか。華奢な体躯にXLの黒いTシャツをまとい、そのアンバランスさがさらに体の小ささを際立たせている。フリースタイルバトル、流れているのは1Train——半世紀前のトラックだ。歓声はまばらで、映り込む観客の数もずいぶんと少なく見える。

後攻のファーストヴァース、少女は怒りのこもった表情でマイクを持ち、画面外にいる対戦相手に、まくし立てるように大声で吠えた。

ふざけんなー。何がSAKI the MIKROFONだー。レジエントは

テメエのアクセサリーじゃねえんだ！ ネームドロップしてえだけの

ガキならばやめちまえ！ 首吊って死んじまえ！ クソ半人前！

テメエみたいなカスにやるMエムーCアイシーはねえ！

テメエだせえんだよ！ 覚悟がねえんだよ！

こっちはそのレジエンド目指して死ぬ気でやってんだよ！

現場一度二度見ていい気になってんな！

ヒップホップ舐めてんのか!? そのでっかちな頭かち割ってるや！

スクラッチ音とともに映像は暗転し、闇が広がる。その継ぎ目のない黒の中で、光源があらば頬を伝う涙は白く光っただろうか。

1

観衆の声、ホワイトノイズ。質の悪い音環境はリアルとはほど遠く、にもかかわらずなぜだかりアルを思わせる。肉の時代は過去の話となりつつあるのに、この箱の中だけは肉の臭いで満ちている。わずか4万4100ヘルツ、あるいはそれ以下の粗雑な音に囲まれて、安普請のライブハウスは揺れる。揺れる。

フロア中を駆け巡る脳内物質とレーザー光。発振器から射出されるフェムト秒の波長は箱の熱気をプラズマ化し、空中に色とりどりの三次元プロジェクトを映し出す。10センチ角の他愛もないイラストレーションは、ここから五分間この会場を沸かせるMCのタグ。フロア中至る所に投影されては、デマゴグめいて場を熱狂させる。ホログラムは裏返るようにして変化して、今度は黒い野球帽ニユーエラを象り出した。正面にはK I L L · r o yの文字——このカードの対戦相手だ。

決して広いとは言えない会場にあって、観客の多さは足の踏み場すらなくなるほど。DJブースの上に掲げられた立体ホログラムの太極図は、九秒あまりで一回転し、箱の空気を、シーンの今を、世の理をも見をなわすようにすら感じられる。

フリースタイルMCバトル「陰陽」^{インヤン}。過熱する技術進歩が変えたのは経済や社会だけではない。いまや地表のほとんどもを包み込むテラヘルツ通信と際限なく膨張するデータベースは、例えばヒップホップという「文化」まで変容させてしまった。フリースの引用、ヴァイナルの探索、偏執的なまでの蓄積文化が外部記憶技術と出会ったとき、ヒップホップは思考を止めた。大方のMCは今や自らの頭で、自らの言葉で韻を踏みメッセージを伝えることなど考えもしない。いかに技巧的な踏韻を生み出せるコーパスを外部記憶に作り出せるか、そのデータ配列や語彙収集法にばかり血道を上げている。もはやヒップホップは文化ではなく、工学だ。Nasの言ったヒップホップの死が本当にあったとすれば、それはニューヨークの死ではなく海馬の外在化が原因なのだろう。

そんな中であって、ラガードやラダイティストと蔑まれながらも、文化としてのヒップホップをどうにか守り抜こうとする者もいる。外部記憶の容量を4キロバイトに制限するリストリクト・ラップの流れはデトロイトから始まった。リストリクトのバトルイベントも数多く開催されている。だが、そのさらに上を行くのが東京・渋谷で年四回開かれる「陰陽」^{インヤン}だ。外部記憶の使用は一切禁止、どうにか二十世紀のヒップホップに立ち返ろうともがいている。シンボルのマークの太極図は、天地と自然を図案化したものだ。

ステージ上に二人のMCが姿を現すと、降ってわいた好カードにオーディエンスは色めき立った。前人未踏の「陰陽」^{インヤン}三連覇を狙う強豪KILLROYに対するは、半年前に突如シー

ンに現れて話題をさらった正体不明の神がかり的ラッパー、リキシ。自らのタグでもある力士のイラストを常に顔に貼り付け、その素顔を晒したことはただの一度もない。人を食ったようなパフォーマンスに、KILL・royはキャップのつばをつまみ上げて睨みを入れた。

まさに一触即発。熱狂する箱の空気は歓声と怒号の境界線を漂い、今にも爆発寸前の様相だ。それを見て取り、ステージ奥に佇むオーガナイザーが笑みを浮かべる。その横に構えるDJに目配せすると、マイクを持ち跳ねるように叫んだ。

「OK、それじゃあさつそく始めよう！ 先攻KILL・roy、後攻リキシの8小節3ターン勝負！」

一世紀前のアトラクタを思わすようながなり声に煽られて箱のムードは一層高まり、それを攪拌するようなスクラッチ音。すぐに鋭利なブレイクビーツへと変わり、場の空気を凝固^{チル}させる。わずか1小節のイントロでビートを掴むと、KILL・royはマイクを口元に構えた。

A Y O リシキだか溺死だか知らねえがミキシング必死だな だっせえなオイ

聞いたぜお前のテープ 貧弱なフレーズ なってないベースじゃ逃げてくヘッズ Y O
 ダサイクソライム 乾いた笑いしか出ない 捌いてやるからまな板に乗りな

新参は新参らしく大人しくクラシックからdigしろやボケが じゃなきや大怪我

大怪我？ 道化が何か言ってるぞってな 正直アンタの顔は蒸気機関車を

思い出すくらい古くさい 薄暗いクスな態度今ここで悔い改めなさい

まさに前時代 気分はJ a y ・ Z かい？ クラシックしか知識がない 意地汚い

態度 会場の奴らをライドオン 沸かすならば場数だけじゃ足りないぞ A Y Y o !

B P M 97 に乗せてライムを刻み、フロウに乗り、パンチラインを繰り出すたびに、会場は歓声の波に飲み込まれる。スキルは互角のインファイト。となれば必然、よりオーディエンスを巻き込んだ方の勝ちとなる。エモ・トラッキングが熱狂の度合いをアートワークとして映し出す、それとてまったくの五分と五分だ。その拮抗具合が起爆材料となり、さらにきな臭くフロアを盛り上げる。

そんな熱気をどこ吹く風とばかり、彩月^{さつき}は会場の片隅、バーカウンターで肩をすくめながらドライ・マティーニを口に含んでいた。カウンターに肘をつき、喉が熱く燃えるのを感じながらぼんやりと宙を眺める。赤緑青^{R G B}の過剰な装飾が網膜を灼き、彩月は思わず眉をひそめた。

「出ないのか？」

新しいマティーニを差し出しながら、バーテンダーが問いかける。三十がらみの男は自身もかつてステージに立っていたらしく、往時を懐かしむような表情で二本のマイクを眺めている。そんな感傷を拒絶するように、彩月は湿った笑みを小さく浮かべて、けだるげに右の手をひら

ひらとさせた。ターコイズの爪が軽やかに揺らめく。つれない態度にバーテンダーは、
「俺はその声、悪くないと思うんだがなあ」

と、ごまかすように笑った。

この箱に来る人間といえど生身のヒップホップを妄信し、その熱に浮かされている者ばかり
のはず。にもかかわらず、彩月はフロアの熱気などどこ吹く風とばかり、辛口のカクテルを流
し込んで喉を灼くばかりだ。

ステージ上の大一番はいよいよ終盤、KILL・royのラストヴァースが終わろうという
あたりで、かろうじて旗色が見えてきた。エモ・トラッキングが映し出す会場の熱気はKILL
L・royのリキシ4。巻き返しのパンチラインをリキシが繰り返すことのできないままに、
DJのスピンは終わりを告げた。

「フオオ！ こおれは！ ヤバイ戦いだつたな！」

興奮しきった様子でオーガナイザーが前に出てまくし立てる。呼応するように観衆も声を上
げ、名勝負の主人公たる二人を拍手と絶叫で称えた。発火点のような熱気の中で、三次元プロ
ジェクションのレーザーがちりつく。そんな中であって、バーカウンターの周りだけはまるで
水底のように冷えていた。

「どうも、あのKILL・royってのは合わねえなあ。リキシほどじゃないがよ」

自らもアルコールをあおりながら、バーテンダーがつぶやく。彩月はそれに頷くでもなく、

ただ透明なグラスに映る自分の顔を見つめていた。長い前髪に隠れた目は涼やかな切れ長で、すっと通った鼻筋や薄い唇は、整っていないながらもどこか淡泊な印象を与える。そしてそれをかき消すような、右頬に横たわる大きな痣。塗りつぶした狂気のように赤黒くただれたそれは、顔の左側を覆い隠す青い長髪と奇妙なコントラストを織りなしていた。

「よし次のバトルはこいつらだ！ ビーネキューブ vs シエル！ 盛り上がっていきましょう！」
気がつけば現場は次のバトルへと移行していて、バーテンダーは氣をとられたようにステージを向く。2メートルに届こうかという大男に対して、マイクを構えるはずが150センチほどの小柄な女性。どちらもそれほど知名度のあるプレイヤーではないようで、先ほどまでの盛り上がりは箱にはない。いや、むしろ女の方はまったくの無名とすらいつてもいい。会場からは小さな当惑のどよめきさえ聞こえてくる。

そんな雰囲気もあつてか、既に勝った気であるのだろう、先攻を貰った大男——ビーネキューブは小さく肩をすくめて会場に向かって笑ってみせた。会場からも一種下卑た笑い声が帰ってくる。ブーイングにこそなっていないものの、完全なアウエーの空気だ。そんな中であつて、シエル本人だけはたじろぎもせず、ひたむきに相手をにらみつけている。その眼光はさながら軍用犬のようですらあり。

「こりやまた」

言いながらバーテンダーが煙草に火をつけた。細く立ち上る枯れ葉の焦げる香りは、しかし

周囲の汗の臭いにかき消される。肺の煙をひと吐きして、

「かわいそうにあの嬢ちゃん、ビーネキューブが相手じゃなあ」

苦々しげに言うのと、すぐ横からくすりと笑い声が漏れ聞こえた。

「……なんだ。珍しいな」

先ほどまではステージに一瞥もくれなかった彩月が、対峙する二本のマイクをじっと見つめている。不敵な笑みは、ステージに向けられているようでもあり、バーテンダーに向けてのものにも感じられる。

「ありやビーネキューブが勝つだろ。あいつは最悪だが……いや、あいつは最悪だからな」

自分の見立てを笑われて、バーテンダーは煙草を強く吸い込んだ。一気に半分以上が白い灰へと変わっていき、残りは金属製の灰皿に無残に押しつけられていく。彩月はその様子を見ながら、バーテンダーに目を向けてまた笑った。まるでギャングエイジの少女のような、挑発的でふしだらな目。

「……分かったよ。じゃあビーネキューブに五千だ」

カウンターに無造作に置かれたしわだらけの紙幣。その上にもう一枚置かれるのを眺めながら、バーテンダーは二本目に火をつけた。

ステージの上では二人のにらみ合いが続いている。今にも殴り合いが始まりそうな張り詰めたテンション。箱のポルテージも破裂寸前だ。